

スペースコロニーの怪物 つ づき

浦島馱朗

「問題は、あの翼の力だ。あれは、ここまで降りてきて再び浮かび上がるだけのパワーを発生できるだろうか」

低重力のところでしか活動できないのなら、心配はない。下へは降りてこないだろうから、とイハラが訊く。

マサトは考え込んだ。普通に考えれば、あの体に対するあの翼のサイズでは無理だ。しかし、どんな異常なパワーを発生できる生体を、竜の製作者が考えたかわからない。イハラこそ専門家ではないか。

「さてよ。あんな空中にあの巨体を維持できるほどの餌があるわけがない。ということは」

怪物は、このジャングルへ捕食に降りてくるのではないか。

「では、先手をうとう。空中にいるうちに、たおすのだ。歩兵になってからでは、どうにもなるまい。下にいる者も、奴が近づいたら一斉射撃してくれ。あれだけの巨体だ、何発弾丸を必要とするかわからんぞ」

言い終わると、アオタは艇に入った。

マサトは、これでいいのだろうかと不安がこみ上げてきた。

「大丈夫でしょうか。飛行艇に勝ち目はあるでしょうか。レールガンは通用するんでしょうね」

イハラも心配そうに、艇の進行を見つめている。

「うん・・・あれだけの巨体の、しかも鱗におおわれた体となるとレールガンといえどもどうかな・・・しかし、弾丸が跳ね返されるということもないだろう」

なんといっても、相手は特別な金属で造られたロボットのようなものではなく、生身であろう。だが、戦闘不能になるまでにどれだけの攻撃が必要かわからない。怪物自身やがては死に至るとしても、それ以前に人間たちが始末されてしまう場合もある。

飛行艇は、巨体の頭部方へ進んでいった。近づくにつれて怪物の大きさが艇と比較されて、下にいる者たちには改めて驚異の感が湧いた。艇の10倍以上の体長であった。

「あ! 」と誰からも、叫びが上がった。艇から、レールガンが発射されたのだ。怪物頭部が激しくのたうつのが、わかった。

「だめだ。弾丸が通らない」

艇のアオタである。

「多少傷は負わせられるようだが、頭骨は相当強固のようだ。これより、胴体部へ移る」

艇は、怒り狂う怪物から離れた。そして再び、怪物の体の中央へ向かって近づいていった。

さらに激しく、蛇体がくねった。弾丸が、長い胴体に満遍なく振りまかれているようだ。

「いいのでしょうか。あれがただ、怪物を怒らせる程度の攻撃でしかないのなら、かえって困ることになりませんか」

マサトはひどく不安になり、イハラを見た。自分たちが、とんでもないことをしているようではなかった。強大な力を持つものに対し、螻蛄の斧を振るっているのではあるまいかと。

黙っていたイハラが突然、

「おお、効いているぞ。明らかに、怪物は弱ってきた」

たしかに誰の目にも、凶暴に荒れ狂っていた巨体が、今は弱弱しい動きに変化しているように

見えた。

「胴体の方が弱いんですね。レールガン通用するんだ。よかった」

「胴体部は、骨と骨の間が空いているからね。頭骨とは違う。鱗程度では、レールガンに抗することはできないんだ」

弾丸が、巨体に無数に食い込むか、あるいは貫通しているのだ。そう思うと、マサトはなぜか今度は、竜に対し痛々しいような気持ちが湧いてきた。奇跡的バイオテクノロジーの産物を、あられもない姿に変えてしまうことがひどく惜しまれた。イハラなど専門家はなおそうだろう。

またアオタにも同様の思いがあるのか、すでに射撃は中断されている。今彼らは、卓越したバイオテクノロジーの成果の最期を見届けようとしているのだ。

ところが、しばらくすると、彼らの思いは急変化した。

「なんてことだ。あれは、蘇ったぞ」

「こんなことが、あっていいんですか」

マサトの声など意識に入らないイハラが喋る。

「回復してしまった。どのようにだ。いったい、作者はどんな秘法を施したんだ。まさかあれが、科学力を超えた神獣というわけではあるまい」

一度は瀕死の状態とも見受けられた巨体は、今明らかに生氣を見せ、力強い動きが感じられた。羽ばたきも強力になったようだ。

「あ!」

と叫びが起こった。それは、艇の通話からも発せられたようだ。

一瞬の出来事で、飛行艇の落下が始まった。怪物の強力な尾の一打が、艇に振り下ろされたのであった。巨大な質量を持つその打撃に、艇はひとたまりもなかった。

「どうした。しっかりしろ!」

「隊長、大丈夫ですか!」

下の者たちが、口々に叫んだ。しかし通話は沈黙していて、飛行艇はぐんぐん落ちていた。

それでも、マサトがいくぶん落ち着いてみると、艇の動力は完全には止まっていないのがわかった。制御する人間の方のダメージが大きかったのだ。

怪物はと見ると、それはまだ艇を追ってはこず、相変わらず、雲の付近に漂っている。降りてきたら、彼らに生き延びる可能性はなくなるだろう。

飛行艇は、川へ落ち込まず、岸へ降りていた。前部が川のスロープの部分へいくぶん乗り出しているが、落ち込む心配はなかった。

着地のショックも、なんとか艇を破壊しない程度であったらしい。それだけ、ファンによる浮力が残っていたのである。

しかし、竜による打撃は大きかった。それはほぼ、艇の真上へ加えられたことがわかった。

「開きません。ゆがんでしまったらしい」

ミノルに答える間も惜しんで、マサトはレールガンを窓へ向けた。が、思い直して窓から中を覗いた。

ヌマガ、操縦席にうつ伏している。アオタはと捜すと両側の席の間に倒れていた。

改めて、窓へ向けてマサトは発射した。防弾ガラスも、レールガンには抗しえなかった。

ミノルが、会釈すると手際よくガラスを処理した。そして、そこから中へもぐりこんだ。ミノルは、怪我のことを忘れていた。

残った二人は、顔を見合わせた。

「どうする。やはり、ドアは開けねばなるまい」

そうなのだ。たとえば、遺体の処置一つにしても。そう考えてマサトは、二人の死をすでに認めてしまっている自分に気づいた。

「どうだ。大丈夫か？ レーザートーチをくれ」

やはり、そう尋ねるべきなのだ。死んだと決まったわけではない。

「ドアを焼ききるんですか。使えなくしてしまっただけは、まずいでしょう。切るのは、最小限にしましょう」

「頼む。うまくやってくれ」

イハラは、トーチを受け取らせるため、退いた。

「隊長はだめだ。ヌマの方は、息がある」

「なに！」

イハラが、マサトを押しつけ窓に近づいた。そしてトーチを受け取り、邪魔なようにマサトに渡し、窓へもぐりこんだ。

マサトはすぐトーチを使いながら、イハラもやはり二人がだめだと思っていたと安心した。二人の死を早めに容認してしまった自分に、彼らの死を願望していた疑いを感じたのであった。しかし、だれもがそう思って当然のできごとだったのだ。

急にトーチを止め、上を見た。竜のこそこそ、最も肝心だ。が、一まず安心した。雲の付近に漂っている。あれが降りてきていたら、他のものの生死など問題ではなかった。

なんとかドアを開けると、ミノルが待っていたようにマサトを呼んだ。イハラは、ヌマを背もたれを倒したシートに寝かせ、各種チェックをしている。アオタも、隣に横たわっている。ミノルはマサトに、なにかを持ち上げる仕草をした。

「隊長は、だめなんですか？」

一応、マサトはイハラに声をかけた。

「うん。全身打撲だ。しかし、ヌマは大丈夫だ。この体は伊達ではなかったということだな。で、隊長だが、ここへは置けない。後ろの例のところへ移そう」

艇の発電能力は失われていないという。後部の貨物室を低温に保つことができる。

ろくにアオタの顔も見ずにマサトは足の方を持った。ミノルの怪我を思い出したが、その相棒はなにも言わなかったので、そのまま遺体を持って外へ出た。

仕事を終えて外に出ると、イハラが上空を見上げていた。

「大丈夫ですか。降りてきたのでは？」

マサトが見上げると、同じ状態だった。

「君は、艇の状態を調べてくれ。なにもないんだろうな、艇には。あいつに対抗できる武器なんて」

飛行艇内に入り、ヌマを見ると眠っているようだった。

気乗りがしないながら、チェックを始めた。機能が万全であっても敵わないのに、どうできるというのだ。ここには、武器といえばレールガンしかないではないか。それが、だめなら。

イハラが入ってきて、又マの様子を見た。すぐ、マサトに
「これは、もう飛べないんだろう？ あいつを倒せないんなら、逃げるしかない。この、内面から
脱出できればなあ」

「動力部がいかれています。ここから飛び立つのは無理です。エネルギー源
は、大丈夫なんです。飛べなくてはいけません。あるのは、電気だけ」

二人は外へ出た。ミノルが寄ってきた。

「又マは、どうです」

「異常はないが、休ませておこう」

竜が降りてきたとしても、艇内の方が安全だろう。外に三人がいれば、艇に注意は向くまい。

「本当にあれは降りてくるんでしょうね。来ないということは、ありえないんですね」

ミノルは、生気のない顔を上空へ向けている。マサトはそれを見て、なにか自分がしなければと力が湧いてきた。しかし、今思いつくことがない。なにか。

マサトは心臓が飛び出すかと思った。ついに、それは来るようだった。怪物は、矮小な人間たちを見出す視力を具えているのだろうか。

「来ます! どうします」

マサトの声はかすれた。

「ジャングルだ。もぐりこむんだ」

三人は急いだ。

「来た!」

イハラが叫んだ時、あたりが暗くなり、みな床へ倒れた。大量の空気が移動していった。

見ると蛇体は、川にそってはるか上方へ昇っていくところだった。まもなくその姿は雲に隠れた。

三人は立ち上がった。すぐ、ミノルがなにか叫んだ。二人が彼の指差す方を見ると、雲の反対側から、また怪物が出現したところだった。

「川にそって、あいつは一周してきたんだ。われわれを弄っているのだろうか」

イハラは疑わしそうな表情になった。

「ああ、来ますよ。今度こそ、降りてくるかもしれない」

そう言いながら呆然としていたマサトは、イハラに背を突き飛ばされた。そのはずみで、彼は樹木の中へ転がりこんだ。また、膨大な空気が移動していった。

三人は、樹木の中から上空を見上げていた。マサトはイハラを見た。

「すみません。危なかった。あいつに、ひっさらわれるところでした」

「だめだよ。気を張り詰めていなければ。生死の境目だぜ。それは、それとして」

マサトのことなど、念頭にない。

「あいつは、下へは降りないのだろうか。だがそれでは、食物が得られない」

「来なければありがたい。ここに隠れていればいいんだ」

ミノルは、人心地がついたという様子だ。

「なにか、来ない理由があるのだろうか。いや今は、来るものとして対策を考えておくべきだ」

ジャングルの中が最も安全と思われる。巨体であるので、障害物の中を小さなものたちを追うのは困難だろう。

「しかしこちらも、この中は速くは移動できませんよ、あまりに乱雑で」

「少しでも、奥へ進んでおこう。あ、ヌマ。彼はどうしたものかな」

と言って、飛行艇へ通話を入れた。が、応答がない。

「まだ眠っているらしい。竜はどうするだろうか。われわれに気をとられているから、艇はかまわないかな」

なにかの方法で、怪物は艇内に生存者がいるのを知ることができるだろうか。

「まあ、いい。今は、自分のことを考えよう」

イハラは、樹木を切り払いながら進み始めた。

また、イハラとマサトが交替で樹木を切り払いながら、三人は奥へと急いだ。時折樹木の隙間から上空の様子をうかがった。

「どうします。このまま、どこへ行くんです。あいつは、降りてこないんだったら」

立ち止まったマサトに二人が追いつき、やがて皆、その場へ腰を下ろした。

「最優先で、なすべきことはなにか。艇が失われた。完全に危険から逃れるには、入り口区へ行くしかない。竜もあそこまでは来られないから。このまま、スロープへ向かうしかない。本部への報告もせねば」

「そうです。艇のことでも」

マサトは、このことを忘れていたのだ。

「艇は二、三の部品があれば、なんとか飛ばせるかもしれないんです」

遺体も運べる。入り口区へいければ、なにもかも解決する。

イハラの顔が輝いた。

「そうか。修理可能か。苦労なくここを動き回れるな」

「ただ、ボディが大きくゆがんでしまったので、完全に機密を保つほどにはなりません。飛ぶにはなんとかかなります」

今のところ、この大気に不安はないし、艇で水中へもぐることもあるまい。

しかし、マサトは顔をくもらせている。イハラは不思議そうだ。

「どうした？」

「だって、あれが飛び立ったら、また竜が来るかもしれないじゃないですか。それなら、直してもぜんぜん意味がありませんよ」

肝心なのは、武器だ。竜を倒す方法をなんとか見つけなければだめだと言った。

イハラは考えこんだが、すぐ気を変えた。

「その問題はあるが、とりあえずは入り口区へ帰ろう。そして、宇宙船になにかないか見て見るんだ」

マサトは、疑いの目だ。

「船になにかありましたか？ あの竜を倒せるようなものが」

「わからん。とにかく戻るんだ。他にどうする。えーと、又マに連絡してみよう。万一彼が回復していなければ、誰か行ってみなければなるまい。とすれば、僕か？」

が、又マは回復していた。不死身の肉体である。

「だから、君は待っていてくれ。われわれは、行く」

入り口区の外にある係留場の宇宙船まで行ってしまえば、惑星連合本部へ連絡できる。そうすれば、この異常、また障害の大きさを知らせることができる。この船の装備では不十分だとわかれば、強力な応援が来るだろう。

そうなのだ。船にさえ帰れば、もう危険はない。なんとか、この円筒の内面を脱出できれば。

やがて彼らは、来る時切り開いた仮の通路に出た。わずかに手を入れただけが、自然のまま

の部分と比べたら格段の差が感じられた。

「今度は、いい。まったく、このジャングルを切り開いて進むのは、もうたくさんですね」
なにか、適当な道具がなければだめだ、とマサトが言う。しかしイハラは聞いているのかどうか、不機嫌な顔だ。

いつの間にか、ミノルが先頭になっていた。足元が通路化しているのだから、通常の服装でも支障ないのだ。あるいは、後方への恐れから、二人の前に出たのだろう。しかし、あの竜が密かに追ってきているとしたら、防護服を着けていても大差ないのではないか。こう思うと、マサトは急に後ろに不安を持ち始めた。後ろにいるはずのイハラがいつの間にか姿を消していた、などとなった。

「うっ、ぐっ」

後ろを振り返っていたマサトは、ミノルの呻きに前を向いた。緑の人影が、樹木の中へ飛び込むところだった。マサトは思わず、銃を向け発射した。トリガーを引いたまま、銃をうち振る。手ごたえを感じたが、すぐにミノルのことに思いが走った。彼が視界になかったことに。

ミノルは倒れてゝいた。カエル男のことを忘れ、ミノルに近寄った。イハラも来た。

「どうだ。大丈夫か。カエル男だったんだな。本当に油断できないな」

黙っているマサトに不審をもち、イハラもミノルへ近づいた。

「これは！ ひどい。あれには、カエル男にはこんな能力があったのか」

マサトも、カエル男の恐ろしい技に肝を冷やしていたのだ。ミノルの首はほとんど繋がっているところがなかった。かろうじて転がり出さなかった、というところだ。一瞬の早業に、ミノルは叫びを上げる間もなかったのだ。

「で、君はあいつを撃ったんだね」

イハラが、植物を見回している。

「手ごたえは、あったのかい」

調べて歩くイハラをマサトは追った。

「たしかに、当たったと思います。あれは、それほど強固な外皮を持っているわけではないでしょう？」

せめて、ミノルの仇は取れたのか。イハラはマチェットを使いながら、樹木の中へ入っていく。次第にマサトは、弾が当たらなかったのではと思えてきた。カエル男はあれほどのジャンプ力があり、さらにこのような乱雑な中へももぐりこむ能力があるのだろうか。はなはだ融通の利く体だ。いやな相手だ。

もっとも、竜よりはるかにましだ。銃が効かないということはない。いやそれなら、死体とは言わないまでも、怪我をした体をそのへんに横たえていてもよさそうではないか。

「当たらなかったんでしょか。すばしこいな。せめて仇は取れたと思ったのに」

「傷は負っているらしよ。血を流している」

カエル男は、かなりの耐久力を持っているのだろうという。痛覚なども弱く造られていて、死の直前まで能力いっぱい動けるのかもしれない。完全に死んだことを確認するまで、気をゆるめてはいけないと言った。

「しかし、今は奴を追っている間はない。先へ進もう。ミノルはどうしたものかな。この状態では、運んでもいけない」

頭部がもげそうで、大量出血している遺体を扱うのは困難だ。

「やむをえないな。放置していくほかはあるまい。遅れることで不利になる」

マサトはうなずいた。ミノルの体は無事に残っているだろうか。なにかに食い荒らされてしまうだろうか。が、自分もここから抜け出せるとは限らないのだ。

「あせって急ぐばかりでは、危ない。注意して進もう。このジャングルの中にまだなにがいるかわからない」

しかし今、マサトはあの竜のことでいっぱいだ。防護服を着けていれば、カエル男くらいは大丈夫だ。問題は、ここを出た時だ。樹木から抜け出した時、あの巨体が頭上に浮かんでいたらどうだ。そう思い上を見上げたが、植物がはびこっていて上空は見えない。

ついに、二人は樹木から抜け出した。この位置では、雲はすでに頭上にはない。上には、反射鏡の支持部がきている。この反射鏡と向こう側の底面にある入射口の間を生じる光線の柱の中に、雲が発生するのだ。膨大な量の光が、このコロニーという円筒の中心軸に存在する特殊粒子に当たり、限りない散乱をしたものが、見る者に雲という印象をもたせるのだ。

二人はすぐ、入り口区へ向かうため斜面を登りはじめた。

「やれやれ、これでやっと、文明圏へ帰れる。船に着いたら、少し休息しましょう」

精神的にも疲れたとマサトが言った。

「あせっても、どうにもならんよな。それより、本部への報告がねえ。気が重いよ」

その時、なにかを感じて二人は後方を見上げた。巨体が近づいてくる場所だった。

「どうします? どっちへ」

入り口区へのドアは、まだ2、30メートルある。登っていけば、重力はぐんぐん小さくなって移動速度は増すだろうが、はたして間に合うか。

「だめだ、もどるんだ。ジャングルへもぐり込むんだ」

(どうして) と思いながらも、マサトは相棒の後をジャングルへ向かった。走っているうちに、ジャングルへ向かえば今までより高度が下がるのだと気づいた。つまり、空中の怪物から少しでも間隔をあけることができるのだ。これが上へ登るなら、逆に近づいてしまう。

マサトがジャングルの仮通路の入り口へ達した時、頭上で空気が大きく移動するのが感じられた。

「ぎりぎりだったな」

イハラ言葉を見上げると、蛇体が今スロープぎりぎりに、頭部を上にして長い体を一瞬垂直になった。ターンしようとしているのだ。

二人は急いで樹木の中へもぐった。怪物が今にもスロープをはい降りジャングルへ入ってくるのでは、と生きた心地がしなかった。今は少しでも深くジャングルの中へもぐり込むだけだ。(待て) もし他にも何かこの中にいたらどうだ。危ない。マサトは周囲に目を配った。パニックを起こしそうな自分を騙しだまし、イハラの後を追う。

しかし、竜は相変わらず空中にいるらしい。ただこれまでより低空にいるらしく、不気味な羽音が周期的に近くなったり遠くなったりして聞こえている。

「あいつは、下へ降りられないのでしょうか。そうなら、少なくともここにいれば安全ですね」

「うん。しかし、それでは何を餌にしているんだ。あの巨体を維持するための栄養源は、どこにあるんだ」

イハラはいらだっている。マサトとしては、とりあえず安全なら大きな喜びだと思うのだが。

イハラが不満なのは、身の安全より竜の生態を知る方にウエイトを置いているからだ。

「動きが取れんじゃないか。入り口区へ行かなければ連絡もできないし、ただここで怪物を恐れて時をつぶしていることしかできない」

「食糧はなんとか得られそうですがね」

イハラは怒ったような顔をしたが、樹木に実っている果実へ目を向けた。